

国際競技大会における口腔外傷への対応 — WC ラグビー 2019, Tokyo2020 大会の 経験から —

近藤尚知*

● 緒 言

2019年に我が国で開催されたラグビー・ワールドカップでは日本中が歓喜に沸き、2021年はコロナ禍であったため無観客状態ではあったが、東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催され、世界中のトップアスリートが東京の地で躍動した。上記のような大規模国際競技大会は誰もが知るところであるが、口腔領域の外傷ならびに歯科医療サポートの現状、歯科医師の役割についてはあまり知られていない。国内では、公式の競技会において歯科医師が帯同する、あるいはマッチドクターを務めることは少なく、2019年のラグビー・ワールドカップが、全ての競技会場の医務室に歯科医師を配置した初めての世界規模の競技大会となった。それ故、国際競技大会における口腔外傷に関する報告はほとんどなく、発生頻度や処置についても不明な点が多いため、各種目の競技会場に配置された歯科医師がどのような準備をすべきかについても明確になっていないのが現状である。本稿においては、筆者がこれまでに経験した2005年6月のラグビーのテストマッチ、2019年のラグビー・ワールドカップ、2017年の冬季アジア大会札幌大会の経験を紹介する。そして、2016年のリオデジャネイロ・オリンピック、2021年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会における競技会場と選手村ポリクリニックにおける歯科の位置づけについても説明し、今後の歯科医師

の果たすべき役割、さらにはスポーツドクター、トレーナー等との連携の重要性についても紹介する。

● WC ラグビー 2019 における歯科医師の対応

ラグビーの公式戦においては、通常は医師が競技会場に派遣され試合中の選手のアクシデントに対応することになっている。2019年に日本で開催されたラグビー・ワールドカップにおいては、グラウンドレベルのマッチドクター(医師)、観客対応の医師、医務室の医師に加え、医務室に歯科医師も配置されることになった(図1)。ラグビー・ワールドカップのメディカル・チームにおける歯科医師の役割は、主に競技中の口腔関連外傷の応急処置であることを念頭に、人選と機器の選定が行われ、各競技会場には、毎試合ごとに1名の歯科医師が派遣された。いずれも、日本ラグビーフットボール協会傘下の関東協会、関西協会、九州協会のメンバーであった。各競技会場には、裂傷等に対する縫合器具一式だけでなく、吸引装置も備え、歯の切削が可能な歯科用機器一式も配備され、万全の歯科診療体制が整えられた(図2)。筆者も岩手県釜石の鶴住居復興スタジアムでWC直前の強化試合として開催されたテストマッチの日本代表対フィジー代表、WC本戦のフィジー代表対ウルグアイ代表の試合で医務室に待機することとなった。前者のテストマッチにおいては、選手が頬粘膜の裂傷と出血で医務室に来たため、縫合による止血処置を施術した。診療室とは違う環境で口腔内の視野を確保しながら処置することが容易で

* 岩手医科大学歯学部補綴・インプラント学講座

Corresponding author : 近藤尚知 (hisakondo@gmail.com)

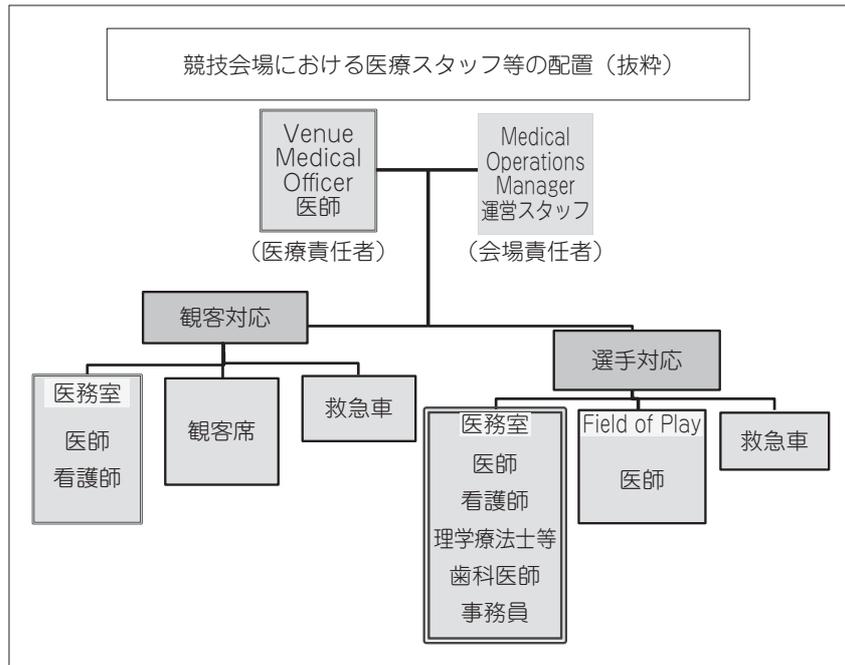


図 1 競技会場における医療スタッフ等の配置 (抜粋) Tokyo2020



図 2 WORLD CUP RUGBY 2019 の歯科医療体制

2019年9月20日 開幕戦 味の素スタジアム (東京都) の医務室に配備された歯科関連機器.

医務室内の歯科診療エリア (左図). 歯の切削, 吸引等も可能な, 歯科診療機器 (右図). (写真提供: 東京都歯科医師会 小枝義典先生)

ないこともわかり, 他の歯科医師に向けての情報共有とともに WC 開幕に向けて良い準備ができ, 万全を期して WC 本番を迎えることができた.

●Rio2016 と Tokyo2020 大会における 歯科医師の役割

海外においては, スポーツの現場における歯科医師の役割が, 日本とは比較にならないほど明確にされており, ボクシング, 空手やラグビーだけでなく, バスケットボール, ホッケー, 水球, ハンドボール等の競技会場にも歯科医師が常駐することが少なくない. 2021年に開催された東京オリ

ンピック・パラリンピック競技大会 (Tokyo2020大会) においては, 準備の段階から, 国際オリンピック委員会 (IOC) によって, 歯科医師の役割が明確にされており, さらには選手村総合診療所にも歯科用チェアにして8台の大型診療施設を構える計画があった. 2019年当時のことだが, 上記のような諸外国の歯科ならびに口腔外傷に対する意識の高さに, 改めて驚かされた.

2020年に開催予定であった Tokyo2020大会の準備のため, 2016年に視察したりオデジャネイロ・オリンピックパラリンピック競技大会 (Rio 2016大会) においては, ラグビー, 空手, ボクシ

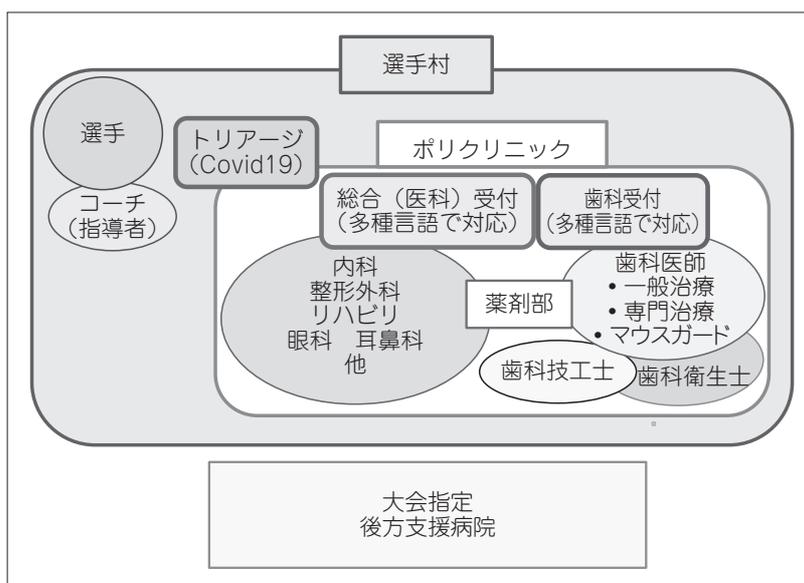


図3 Tokyo2020大会の選手村ポリクリニックの概要
通常の体制に加え、クリニックの入り口にCovid19のトリアージが設けられた。



図4 診療室①（左）、診療室②（右）
各診療室に、空気清浄機と口腔外サクシオンを設置。
©Tokyo2020

ング、バスケットボール、ホッケー、ラグビー、水球、ハンドボール等の競技会場に、歯科医師が常駐し、口腔外傷に対して万全の体制が敷かれているとのことであった。選手村総合診療所においても、8台の歯科用チェアに加え、CT（歯科用コンビームCT）も配備されており、頬骨弓や顎骨骨折の鑑別診断にも活用されていた。

Tokyo2020大会は、Covid19感染症拡大の影響で、2021年に延期され、無観客という異例の措置の下で開催された。通常の設備に加え、Covid19に対する感染対策もあり、患者導線から診療体制

の変更など、全てが初の運用であったが、日本歯科医師会・東京都歯科医師会、東京都歯科技工士会、東京圏の歯学部を中心に多くの歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士の協力が得られ、歯科部門も十分な診療体制を整えることができた（図3）。そして全ての診療室を個室として、空気清浄機、口腔外サクシオンを設置し、開村直後から、N95マスク、フェイスシールドを含めフルPPEでの診療体制をとり、感染防止措置を講じながら、世界中のトップアスリートに対して、日本の技術力の高さを示すべく、かつ世界随一の歯科医療を提供

することができた (図 4).

コンタクトの多いスポーツの競技会場においては、歯科関連の救急対応についても万全の体制を整備していたが、思わぬ案件もあり、陸上競技の練習場で棒高跳びの選手が、落ちてきたバーの直撃を顔面にうけ、前歯が破折する事態があった。陸上競技の現場での口腔外傷は稀であり、その場での対応は不可能であったが、ポリクリニックは夜間も 23:00 まで開院していたため、救急搬送して事無きを得た。

意外なところで口腔関連外傷もあり、歯科医師の待機する競技会場よりも、むしろ歯科医師のいない競技会場における対応をどうするかという課題が浮き彫りになったかたちであるが、近い将来、オンライン診断と地域の医療ネットワークの構築など、ICT の活用によって解決されることを期待したい。

●総括

WC ならびに Tokyo2020 の競技会場あるいは選手村ポリクリニックでの歯科医療の提供に関わった多くのスタッフから、トップアスリートのコンディションの維持・向上をサポートできたことは、他では得ることのできない貴重な経験であったこと、さらに、これらの国際交流の場にいたことを誇りに思っているという後日談が各所から聞こえてくる。さらに、IOC の Medical and Scientific Director の Richard Budgett 先生から、「TOKYO 2020 NOC Focus Group Report で、ポリクリニックはこれまでに開催されたオリンピック史上、最高の評価だった。"The polyclinic was considered as the best ever at any Olympic Games."」というたいへん嬉しい知らせを頂けたことを報告し、日本の医療の更なる発展に期待して、結びの言葉としたい。